Humboldt's Gift

——始源への旅——

今 石 正 人

> Anybody who has survived his childhood has enough information about life to last him the rest of his days.
>
> Flannery O'Connor[1)]

I

Saul Bellow が1975年に発表した *Humboldt's Gift* は500ページに及ぶ大作であるが，その冒頭に近い部分で，主人公＝語り手 Charles Citrine は次のような回想をする。

In the Twenties kids in Chicago hunted for treasure in the March thaw. Dirty snow hillocks formed along the curbs and when they melted, water ran braided and brilliant in the gutters and you could find marvelous loot—bottle tops, machine gears, Indian-head pennies. And last spring, almost an elderly fellow now, I found that I had left the sidewalk and that I was following the curb and looking. For what? What was I doing? Suppose I found a dime? Suppose I found a fifty-cent piece? What then? I don't know how the child's soul gotten back, but it was back. Everything was melting. Ice, discretion, maturity. What would Humboldt have said to this? (p.2—3)[2)]

20年代のシカゴの子供たちは，三月の雪どけになると，宝さがしをやったものだ。うすぎたない雪の山が歩道のふち石にそってできているが，それがとけはじめると，水がきらきら光りながら，もつれ合うようにしてみぞを流れ，すばらしい戦利品の数々が姿をあらわしてくる——ビンのふた，機械のギア，インディアンの顔のついた一セント銅貨など。そして，去年の春，いまでは老人といってもよいわたしは

歩道から足を踏み出して，ふち石ぞいに歩きながら，きょろきょろあたりを見まわしている自分に気がついた。なにを捜している？　十セント銀貨が見つかったとしたら？　五十セント銀貨が見つかったとしたら？　だったら，どうだというのだ？　三つ子の魂がどうやってよみがえったのか，わたしにはわからないが，よみがえっていたことに間違いない。なにもかもとけかけていた。氷も，思慮も，分別も。フンボルトが知ったら，なんといっただろうか？

シトーリンは1918年生れであるから，回想の前半は彼の少年時代の想い出である。どんな子供でも，この種のことは経験したことがあり，まずこの部分は読者にとって容易に理解できる。「去年の春」というのは，シトーリンが今，この物語を語っていると考えられる年から見て「去年の春」であり，彼はすでに55才であった。ピューリッツァ賞を受賞したことのある劇作家，伝記作家の男が，いい年をして，道路に何か落ちていないかときょろきょろ見回している図は滑稽であることには違いないが，それでも理解不可能なことではない。しかし最後の三つのセンテンス，"Everything was melting. Ice, discretion, maturity. What would Humboldt have said to this?" は一体何を意味しているのか。表面的に見れば，初老の男が，雪どけ (Ice melting) の道路を歩いていて，突然童心に戻り (discretion, maturity melting). 思わずあたりを見回したということにすぎない。では何故，彼の先輩であり友人であった今は亡き詩人フンボルトのことに言及しているのだろうか。そもそもこの回想は何故語られているのか，それはもっと深いレベルで作品全体とどんな関係をもっているのかを，シトーリンの子供のイメージを軸に考察してみたい。

II

『フンボルトの贈物』において，子供への直接の言及は多くない。大部分は，シトーリンによるフンボルトの回想，それと並行して彼がまき込ま

れる離婚訴訟，ヤクザの脅迫，Renata という若い女性との恋愛と失恋という一連の事件，更に，死やアメリカ社会と芸術に関する彼の形而上学的なモノローグで占められている。しかし，それが彼自身のであれフンボルトのであれ，子供時代の回想はこの作品の本質的な部分を解きあかす重要な鍵であることは見落されてはならない。

シトーリンは少年時代，同じユダヤ系移民である Lutz 家の娘 Naomi に恋をする。そして当時の自分を次のように回想する。「ネイオミ・ルーツを愛しているとき，わたしは安全に人生の内側にいた。…死は，人生という代物の，結局は受けいれることのできる一部分だった。」(When I loved Naomi Lutz I was safely *within life*.... Death was an after all acceptable part of the proposition. p. 73.) (そして当時彼が愛読していたのはプラトンでありワーズワースでありスインバーンやフロベールであった。) 少年時代の彼が，現在から振り返ってみれば人生の内側にいて死を受けいれることができたということは，逆に彼の現在の状況を暗示するものにほかならない。暗示どころではなく，シトーリンは〈人生の内側〉にいない自分，〈死を受けいれること〉のできない自分を鋭く意識しているのである。そして〈人生の内側・外側〉というとき，そこには〈人生〉あるいは〈世界〉と〈自己〉というものの対立関係が前提になっており，〈死を受けいれること〉ができないというとき，〈生〉と〈死〉は分離され非連続なものとして認識されているというのは言うまでない。それはおそらく現代アメリカという世界が人間にもたらした一つの特異な現象なのかも知れないし，あるいは又，もっと違った原因による帰結としての現象なのかも知れない。

まず，シトーリンの眼にこの世界がどんなイメージをむすんでいるのか考えてみたい。手垢に汚れた言い方ではあるが，彼にとって現代アメリカは，物質主義，産業主義文明を背景とした巨大なビジネスとテクノロジーが支配する非人間的な機構として映っている。アメリカ合衆国は，「大規模な，とてつもなく大規模な企業」(a big operation, very big. p.5.) であり，その「企業」を貫く原理は，プラグマティズム，〈現実原則〉であり，「も

ろもろの超越的な力をがっちりと備えたビジネスは，ビジネスの慣習によって人生を解釈することを，わたしたちすべてに迫っている。」(Business, sure of it's own transcendent powers, got us all to interpret life through its practices. p.459.) シトーリンのアメリカ社会に対する呪詛や絶望は枚挙にいとまがない。「こいつが大きいほど，わたしたちの影はうすくなり」(The more *it*,the less *we* p.5)「外なる奇跡がいくらもあるので，芸術や内なる奇跡を必要としないアメリカ。」[3] (America didn't need art and inner miracles. It had so many outer ones. p.5.) 波のごとく押し寄せる情報に，一個の感性が打ち勝つことはとうてい望み得ず，人間は巨大な力に翻弄される無力な犠牲者にすぎない。もちろんベローの諸作品の中には，いわゆる〈reality instructors〉と呼ばれる，ステレオタイプ化された一群の人物がいないわけではない。それどころか実は，こうした人物で満ちあふれている。彼らは根っからのリアリストであり，アメリカ社会のエトスを代弁するものであり，この世界で自由に泳ぎ回る術を身につけ，彼ら独自の現実感覚を備えている。〈死〉を忘却に追いやるべくせっせと distractions（人間の注意をそらせるもの）を産み出し，魂や永遠の生命などというようなものは時代錯誤の非合理的迷信として片づけ，商品化され，カテゴリーに分類された〈真〉〈善〉〈美〉を喜んで受けいれる。むしろ，シトーリンのように人生の内側からはじきとばされた人間として自己を意識する方の人間が圧倒的に少ないのである。

この意識はフンボルトの少年時代を回想するシトーリンの語りにも明らかにされる。フンボルトはかつて30年代に出版した詩集で華々しい成功をおさめたものの，次第にアメリカ社会との格闘に疲れ，名声も富も栄光も失い，精神病院に出入りし，失意と貧困のうちにニューヨークのうらぶれた安ホテルで死んだ人物である。

A boy like Humboldt, full of heart and imagination, going to the public library and finding books, leading a charmed life bounded by lovely horizons, reading old masterpieces in which human life has its full value,...But there it ends. The significant space dwindles and disappears. The boy

enters the world and learns its filthy cutthroat tricks, the enchantment stops. (p.352.)

心情と想像にあふれたフンボルトみたいな少年が，公立図書館へ通って，いろいろな書物を見つけ，美しい地平線にかこまれている魅せられた人生を送る。…ところが，そこですべては終ってしまう。意味ぶかい空間はせばまり，やがて消失する。かつての少年が世間に出て，うす汚い，食うか食われるかのやり口をおぼえるとき，魅せられた状態はおわりを告げるのだ。」

同様のことを，シトーリンはレナータの息子 Roger にも感じる。「このロジャー少年を見ていると，ある時期までの人間の魂は，その肉体の芸術家であると確信せざるを得ないような気持ちになり，ロジャーがみずからの内部で活動しているのを感じることができるように思う。」(Roger could very nearly convince me that up to a point the soul was the artist of its own body and I thought I could feel him at work within himself. p.428.) しかし同時にこの少年がやがてこの上もなく平凡で退屈な人間になることをも予感しているのである。シトーリンの少年時代だけでなく，フンボルト少年，ロジャー少年に共通していることは，三人とも〈芸術家〉であり，自分の内部で活動している，ということである。まだ外界と自己が分裂しないで，安全に〈人生の内側〉にいて，みずからの内部に存在している至福の時期。「ああ，あのハーモニーと甘やかさ！あの芸術」(Ah, that harmony and sweetness, that art ! p.352.) しかし子供時代の外界との一体感は早々に破られ，〈エデン〉を追われた者としての苦悩がはじまる。残忍苛酷な〈現実〉が我々を待ち構えており，我々はこの〈現実〉と折り合ってゆくため，イノセンスを失ない汚れ堕落していくという事実は，いささか図式的すぎるものの我々の人生の認識の基底に横たわっている。

では結局シトーリンは，人間を，現実によって剝奪され鋳型にはめこまれるものとして，見ているのだろうか。自然主義者たちのように，人間は決定論的に，遺伝とこの不可抗力的なアメリカの現実の産物であり，環境

＝加害者，人間＝被害者と見ているのであろうか。

III

まず最初に結論めいたことを指摘しておけば，このアメリカという現実以外に，もっと別次元の〈現実〉があるのではないか，逆に言えば，彼が常に出会い，まき込まれるものは現実そのものではなく，現実の変形物，特殊にパターン化され整理された現実ではないのか，という予感がシトーリンにはあるということである。レナータとフランスに旅行した時，彼女が窓外の風景を指さして「きれいじゃない」と言った時のシトーリンの反応が，これを例証している。彼はその風景が美しいことは認めたものの，しかし，「『きれいなもの』ならなん回となく見たことがあったので，わたしは目を閉じた。わたしは『現象』というこてこてと塗り立てた偶像を拒絶したのだ。この偶像を見るように，わたしも人並みに訓練されてきたが，その横暴さにはうんざりしていた。」(I had seen Beautiful many times, and so I closed my eyes. I rejected the plastered idols of the Appearances. These idols I had been trained, along with everybody else, to see, and I was tired of their tyranny. p.15.) レナータが指さした〈美〉は現象にすぎない，その奥に実在の〈美〉があるのではないか。アメリカという外部から押しつけられた現実認識や美意識を通して物を見，その中で生きることを余儀なくされ，本物の現実から遠ざけられ遮断され，〈人生の内側〉にいない自己を発見するシトーリン。このことは，フンボルトがロぐせのように語っていた，今は失なわれてしまった根源的な世界というものが，実は子供がかって経験した世界に深くかかわっているということを示唆している。プラトン的世界への言及は作品を通じて何度も繰り返されるキー・フレーズであるが，そのプラトン的世界が、先に引用したロジャー少年の描写の直後に語られているのは興味深いことである。「自分の内部で活動している」「芸術家」としてのロジャー少年も，やがてこの至福の時期を通りすぎ，退屈な故郷喪失者になるだろうというシト

ーリンの想像のあと，つづけて彼は次のように語る。「フンボルトは，明けても暮れても，彼のいわゆる『ふるさと的世界』，牢獄が濃い影を落とす以前のワーズワース的，プラトン的世界について語っていた。この影が落ちるときがきっと，退屈がしのび寄るとき，出現の時点というわけだろう。(Humboldt was forever talking about something he called "the home-world", Wordsworthian, Platonic, before the shade of the prison house fell. This is very possibly when boredom sets in, the point of advent. p.428.) この「現象としての現実」を突き抜けたところに，もう一つの「本当の現実」があることを，子供はそのイノセンス故に（純真という意味においてと同時に，現実に対して無知であるという意味において）直観として知っていたのではないか，とシトーリンは考える。そうすると彼にとって問題になってくるのは，〈客体〉としての現実ではなく，むしろその現実をどういう風に見ているかという〈主体〉の問題になってくるのである。だからこそ，「教育のある者は，幻滅的な(退屈な)世界について語る。だが，幻滅しているのはわたし自身の頭であって，世界ではないのだ。世界が幻滅することなどあり得ない。(The educated speak of the disenchanted (a boring) world. But it is not the world, it is my own head that is disenchanted. The world *cannot* be disenchanted. p. 195.) と結論するのである。こういう時，シトーリンは，ロマン派の正統な継承者として我々の眼に映ってくる。西欧近代の合理主義，科学万能主義によってもたらされ一層深刻化した主体と客体の分裂をどのようにしてもう一度統合するかということが，ロマン派のイメージの成り立つ地点であった。そして何よりもロマン派は子供に〈始源的無垢〉を見出して，それを人間性回復の原点にしようと主張したことは周知の事実である。

ではフンボルトの言う〈失なわれた故郷〉に回帰する方法は果してあるのだろうか。シトーリンは今一歩問題の核心に近づいてゆく。「だが魅力を失なったのは果して世界の方だろうか」否，である。「それはむしろ，個々の人間を自由に創造と結びつける想像力は存在しない，などと勝手に信じこんでしまったぼくらの精神のほうなのだ」(But is it the world that

is disenchanted? It's rather our minds that have allowed themselves to be convinced that there is no imaginative power to connect every individual to the creation independently. p.352.)「想像力」の問題はこの作品だけでなく，ベローの諸作品，特に *Henderson*[4] においてきわめて重要な概念になっている。シトーリンはゲーテに言及し，彼が帰納法によって示されている限界にとどまろうとせず，むしろそうした命題や法則や理論を超えて〈そのもの〉の中まで想像力をはいりこませ，どの程度にまで川や星になれるかをためそうとして，川や星になった真似をし——絵具や文字で描かれた現象のかたちの中に入っていったかということを語っている。こうした想像力の働きにとって，知識や理論は無役であるばかりか，現象の奥を透視することを阻害してしまう。シトーリンが何度か言及しているブレイクについて，ピーター・カヴニーはその著『子供のイメージ』において次のように述べている。

> ブレイクはイギリス合理主義の原理に反対の立場から書いた。「白痴の理性人」が「想像力ある人」をあざ笑う，とブレイクはきめつけている。…ベイコンの実験的方法，ニュートンの物質主義的物理学，ロックの感覚論は，完全に彼の呪いを受けた。かれらは共に，「理性」のおぞましい影響，「生命」に対抗する力としての抽象的「知性」の力の象徴であった。そこで彼は，社会のいたるところで，かれらの物質主義の産物である諸制度を糾弾したのである。政治，宗教，産業，教育の分野において，ブレイクの主張はとにかく首尾一貫していた。そして，その一貫性の核心となったのが，無垢な子供というシンボルであった[5]。

子供にとって，この世は〈想像〉と〈ヴィジョン〉からなるひとつの世界であり，変容を秘めた世界である。雪が溶けはじめ，きらきらと輝く水に変わり，その下に隠されていた数々の宝が現われる。それはパターン化され，一般化され，抽象化された美とは異質無縁のものである。しかし宝の

ありかを知っている子供たちが成長し，科学や思想や文化の断片知識を頭につめこみ，既成の現実認識を押しつけられ，私的公的な情報に注意を拡散され，知的な人間でありさえすれば，「次元の高い生活が確保できると信じた時」(I believed that being an intellectual assured me of a higher life. p.180), この世界は，「現象というこてこてと塗りたてた偶像」に堕ちてしまい，決っしてその実在（雪の下の宝）を顕わさなくなるのである。残された道は一つ。少くともその第一歩は，ありとあらゆる「努力によって得られた知識」(knowledge achieved by effort.) を放棄し，「事物の本質を聞きとり，うそのような出来事を理解できる，耳をすましている魂」(the listening soul that can hear the essence of things and comes to understand the marvelous. p.295), すなわち子供が本来的に備えていた「想像力」「直観力」をとり戻すことである。この想像力のみが，実在の世界への扉を開く鍵なのである。

IV

こうしてシトーリンは長い放浪の旅を経てシカゴの雪どけを回想している。すべてが溶け去っている。氷だけではない。「成熟や現実生活（浮き世のなりわい，自己保存，生存競争など）(maturity or realism ((practicality, self-preservation, the fight for survival)) p.71) もまた溶けはじめているのである。こうしてこの物語りが語られている現在，彼は「ヒステリカルで，グロテスクな世界，残酷で，不正な世界，わたしがいつもみずから進んで積極的に参加していたあの狂気の世界，悲嘆にあふれた世界 (the hysterical,... the grotesque, the abusive, the unjust, that madness in which I had often been a willing and active participant, the grieving, p.171.) を旅して〈始源〉に立ち戻ってきた。もちろん元通りに戻ったのではなくアメリカ的現実の〈経験〉という重圧に満ちた場をくぐり抜け螺旋を描いて戻ってきたのである。

そしてこの帰還を祝福しているのは他ならぬ，墓の下に眠るフンボルト

であろうことをシトーリンは感じる。この小論では触れることができなかったが，彼はフンボルトが死後，彼に宛てて映画の梗概を贈物として送ってくれていたことを発見する。この贈物は経済的に窮地に追いこまれていた彼にとっては，将来の立ち直りを約束してくれる貴重なものであるが，もっと深いレベルでは，彼に始源への旅を促し，アメリカの現実などとは対照的に異なる世界を発見せしめるに至った，フンボルトの生きざま，死にざまの総体が何よりも第一義的な価値をもった贈物なのである。

この作品の主人公で語り手のシトーリンは年令，離婚歴，職業，経歴，身体的特徴，また彼の思想，人生観などすべての点から作者ベローとほとんど重なり合うため，*Herzog* 同様，その自伝的要素が批評家の間で論議をよんでいる。筆者もシトーリン＝ベローという認識に立って，この小論のテーマに関係があると思われるベロー自身の発言を紹介してこの論を終りたい。

I suppose that all of us have primitive prompter or commentator within, who from earliest years has been advising us, telling us what the real world is. There is such a commentator in me. . . . There is that observing instrument in us—in childhood at any rate.[7)]

> 私たちすべての中に，原始的なプロンプターというか注釈者がいて，幼い頃から私たちに忠告を与えつづけ，本物の世界とは一体何であるのかをささやきつづけているんじゃないかと思う。私の中にもこのような注釈者がいる。…少くとも私たちの子供時代には，この観察力鋭い媒介者はいるものです。

There is another reality, the genuine one, that we lost sight of. This other reality is always sending us hints, which, without art, we can't receive. Proust calls these hints our "true impressions." The true impressions, our persistent intuitions, will, without art, be hidden from us and we will be left with nothing but a "terminology for practical ends which we falsely

call life."[8]

もう一つ別なリアリティーがあって，それは本物のリアリティーなのではあるが，私たちはその姿を見失っている。このもう一つのリアリティーは絶えず私たちに暗示を送り出してくるのだけれど，もし芸術がなければ，私たちはそれを知覚できない。プルーストはこれらの暗示を「本当の感銘」，と呼んでいる。この「本当の感銘」，すなわち私たちの直観的に把握した真理は，もし芸術がなければ，私たちから隠されたままで，私たちに残されたものは「私たちが誤って人生と呼んでいる実利的な存在目的に対する専門用語だけ」であろう。

Notes:

(1) 「子供時代を生きのびた人なら誰でも，生涯にわたって彼を持ちこたえさせるに充分な，人生についての情報を持っている。」Flannery O'Connor, "The Nature and Aim of Fiction," *Mystery and Manners*, (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969), p.84.

(2) Saul Bellow, *Humboldt's Gift*, (New York: Avon Books, 1975), p.2–3. (以下 *Humboldt's Gift* からの引用は引用の最後にページ数を記した。日本語訳は大井浩二氏の訳によった。)

(3) 作家のフィリップ・ロスはアメリカの小説家が直面している問題を次のように述べている。「アメリカ的現実は作家を呆然とさせ，吐き気を催させ，激怒させ，最後には貧弱な想像力の手にあまるものとすらなるのである。アメリカの現実はわれわれの才能を常に圧倒し，アメリカの文化はいかなる小説家にとっても垂涎の的であるような人物を毎日急造しているのだ。」トニー・ターナ著佐伯彰一，武藤脩二訳，「言語の都市」(白水社，1980年). p. 323–324.

(4) 拙論，"Henderson the Rain King: 〈ただ在ること〉をめぐって，" 「英米文学研究」第16号，(梅光女学院大学英米文学会，1980)，p.114–118.

(5) ピーター・カヴーニ著，江守徹監訳，「子どものイメージー文学における『無垢』の変遷」(紀伊国屋書店，1979年) p. 48.

(6) 抽象化一般化の道をたどる科学的認識や思想体系に対して，ベローは想像力やインスピレーションの重要性を次のように述べている。「具体的なもの，個別的なものを救い出し，肉や骨の価値を取り戻すためには，想像力やインスピレーションに頼らなくてはならない。」Saul Bellow, "Deep Reader of the World, Beware," in *Herzog: Text and Criticism*, (New York: The Viking Press, 1976), p.368. これは，ブレイクが主張している真理「一般化することは愚者となる道」と重なり合うものである。

(7) "Saul Bellow: An Interview by Gordon Lloyd Harper," in *Herzog: Text and Criticism*, p. 351–352.

(8) Saul Bellow, "The Nobel Lecture," *American Scholar*, (Summer, 1977), p.321.